

## 審査の結果の要旨

氏名 岩下誠

近代イングランドの教育制度の特質として、宗教団体や市民団体など任意団体の自発的活動に基礎を置くヴォランティアリズムがあることはよく知られている。しかし従来、ヴォランティアリズムは、国家関与による公教育制度の成立を遅らせるネガティブな要因として解釈されてきた。本論文は、1780年代から1830年代にかけて、任意団体の活動が民衆教育を担い、さらには国民教育としての公的な認知を獲得して行く過程を歴史的事例に即して詳細に再構成し、そのことを通して教育における公共性の理解に新たな視点を提示した研究である。

本論文は、序章、本論二部五章、および終章から成る。序章で先行研究を概括し、任意団体の公的役割を重視する最近の研究動向を抽出した後、第一部では、貧民教育が民衆一般を対象とするマス・エデュケーションへと転換し公的な関心事として浮上する過程を、サラ・トリマー(1741-1810)に焦点を当てて描き出す。日曜学校の研究史を概観した第一章に続いて、第二章ではトリマーの手がけたブレントフォード日曜学校の事例が、第三章ではベル・ランカスター論争の発端ともなったトリマーによるランカスター批判が検討される。日曜学校は労働者階級の規律化という地域社会の統治の問題に教育を結びつけ、教育に公的性格を与えた。また、国教会保守派の立場に立つトリマーのランカスター批判は、国民的(national)な制度に相応しい教育の内容・方法を争点にすることで、教育を正統性のレベルで問う議論の地平を拓くことになった。

第二部では、マス・エデュケーションが国民教育として概念化され、かつ任意団体による教育供給として具体化されていく過程が描かれる。第四章では、モニトリアル・システムの正統性をめぐるベル・ランカスター論争を検討し、国民教育(national education)という概念が、両派の間で異なる意味づけを与えられつつ、教育供給者としての正統性を支える根拠として重要な役割を演じていった経緯を浮き彫りにする。第五章では、ベル派による国民協会設立の過程が、派内の内部対立にまで立ち入って跡づけられる。高位聖職者の指導下に協会を置こうとした最保守派の目論見は斥けられ、国家や国教会との特権的なつながりによってではなく、任意団体としての公的性格によって正統性を確保する方向で国民協会は設立されたのであった。終章でこれまでの議論を総括し、任意団体が公教育の担い手として登場することで、名誉革命体制をめぐる国政上の葛藤を顕在化させる政治的アリーナとして教育が浮上すること、教育の公共性もこのレベルで読み解かれるべきことを指摘して本論文は閉じられる。

以上のように、本論文は、具体的な対象に即した堅実な歴史研究に基づいて、任意団体が正統性の獲得をめざしてしのぎを削り国政上の立場の違いを浮上・交錯させる空間として教育を捉えるという、教育の公共性に関する新たな視点を打ち出すことに成功している。以上により、本論文は博士(教育学)の学位論文としての水準を十分に満たす優れた研究と評価された。